

『
廻
想
録
』

—廻想I—

思い出の中に棲まう、一人の少女のこと。

その刹那は、過去に囚われながら生きる私にとっては永遠であった。

カーテンの隙間から溢れる無遠慮な朝日は、瞼を閉じても眩しく、私を現世へと引き戻す。

眠りは死の疑似体験だ。数時間もの間、自分の意識を失くし、意思も存在しない。それは生きていけると言えるだろうか。思うに「眠り」と「死」の違いは、目を覚ますかどうかというだけだ。

幸せな夢でも見ながら、いつそ朝が来なければと思う。それでも結局こうして、うんざりする程に清々しい朝日を浴び、懲りもせずこの世に帰ってくるのだ。

この現実には、ずっと悪い夢を見ているようだった。目を覚ましたら、私はまだ高校生で、今までのことは全部夢だった——なんて風にならないかと馬鹿げた空想をする。

ただ生きていくだけで、何も残らない日々。これといった熱意もない仕事で得るお金の使い道は、最低限の生活にかかる費用。そして、高校生の時から惰性的に続けている音楽活動の資金。

——私は何の為に生きている？

——私はなぜ音楽をやっている？

そんな自問が毎日のように頭を巡る。当然、その答えが出ることはない。

気が付けば、あれほどまでに私を突き動かしていた純然たる何かが、いつの間にか薄れてしまっている。大人になるといふのは、そういうことなのだろうか。そうして、何もかも昔のことだと、甘んじて受け入れてしまふのだろうか。

でも、今でも私の欠けた心象を埋めるのは、希望に満ち溢れたあの日々的情景。鳴り止まない音楽。

こうして思い返すと、どこかの遠い時代の世界のことのような、懐かしい物語のようでもある。私が出会った一人の少女と、少女と生きた日々のこと。

彼女は大切な友達でもあり、目標や憧れの対象でもあり、どこか姉妹のようでもあった。

今となってはその眩しさを目を細めてしまう程に輝かしい時代。

かつての私が、今の私を見たら何を思うだろうか。

今日、私は初めて仕事を無断で欠勤した。携帯電話の電源を切り、外界の何もかもをシャットアウトした。不思議と罪悪感はなかった。妙な解放感があった。段ボール箱に入れっぱなしになっていた、学生時代の思い出の音楽CD達を引っ張り出してきて再生していった。

そんなことをしている内に、いつの間にかもう昼になっていた。仕事をしている時の何倍も時間が過ぎるのが早い。ペランダの手すりに寄りかかりながら、うつけたようにぼんやりと景色を眺めていた。ただただ時間が過ぎるのを待つように。

寂しさを憶える程に澄み切った青い空。

その青く染まったキャンパスの上に、一滴のインクがぼつりと落ちて滲んだように、微かな白が浮かんでいる。

真昼の月。

それを見る度、在りし日の彼女と、彼女の言葉を思い出す。

そして、あの日からずっとあったはずの突き刺さるような胸の痛みが、段々と薄れてきていることに気付いて、どうしようもない虚しさに襲われた。

私は、今でさえ彼女の死を受け容れられていない。もう二度と会えないのだと頭ではわかっているはずなのに。それを受け容れてしまえば、本当に彼女は消えてしまうような気がしているからだ。

私はまだ彼女にさよならも云えていない。

ユマ、私はどうすればいい？

どんなものもいつか終わりがあはることわかっている。

それでも、止め処なく流れていく時間に、この記憶が攫われてしまうことが許せなかった。

だから私は彼女を綴り始めた。

— 廻想 II —

高い建物に四方を囲まれた、都市部の狭い空の下。

大気には初冬の気配を醸し出す牡丹雪が静かに舞い、積もることなく溶けていくそれが地面を僅かに濡らしている。

たくさんの人が行き交う、百貨店の前の小さな広場。そこで私は初めて彼女の歌を聴いた。

透き通るような声をしながらも力強く、伸びやかで美しい歌声。

冬の冷えた空気を震わせながら伝うそれが、私の耳を通り躰中に染み渡っていく。

学生服を着て、アコースティックギターを弾きながら歌う、美しい長髪の少女。私はその少女に見覚えがあった。以前通学時に出会った子だ。彼女はどこか神々しくて、その時の私には彼女が自分と同じ人間とは思えなかった。

そんな風に思えてしまう程、彼女の歌と曲は、私の胸を真っ直ぐに貫いた。

後に彼女から、あの時の歌の名前を教えてもらった。

『生きるよすが』

その名の通り、それは私にとってのよすがとなった。

彼女に憧れて自分も音楽を始めて、気が付けばもう6年程が経った。

かつて彼女は、私に《リノ》という名前をくれた。

音楽家としての私の名前。それはもう一人の私。それは本当の私。それは偽りの私。

その名前が今、街頭の巨大なディスプレイに映し出されている。私はそれを見上げながら、物思いに耽っていた。

物数ならぬ日常の些細な閑談の中の、彼女の言葉を思い出す。

彼女は時折、私が思いもしないような話をする。それは思索的で、どこか哲学めいたもの。

いつも、彼女は私とは違う世界を見ているような、ずっと遠くの何かを観ている気がした。どこかにいる誰かのことを思っているような、物憂げな表情で遠くを見つめる。そんな、彼女の読めない横顔を見る度に、なぜか胸が締め付けられる感覚がした。

創作というのは、この世で最も美しいものだと思う——と、いつか彼女は言った。今なら、その言葉の意味が少しはわかる気がする。

彼女の意志に寄り添うように、そして彼女を少しでも理解したくて、音楽を続けてきた。

そこに何か救いがあるのだと思い込んでいた。

私自身に、本当の価値なんて無いように思う。所詮は彼女の真似事をしているだけ。彼女に倣うだけの、偽物だ。

書き込んだ五線譜の中にも、詩を書いたノートの中にも、私はずっと彼女の面影を見ている。

ただ彼女を追いかけているだけだ。

リノという存在は彼女が作ったものと言ってもいい。

音楽の神様がいるとしたら、その神様に愛されていたのはきっと彼女の方だ。なぜ彼女ではなく、私が生きているのか。今もわからない。

気が付けば、また彼女の歌を書いている。もう彼女も呆れていると思う。でも、それでも、何度だって彼女を綴る。

全てが過去に、思い出になって遠ざかっていく。時が経つにつれ、まるで何も

かも最初から無かったみたいになるのが怖かった。

悲しみを乗り越えるだとか、前に進むだとか、私にはどうだってよかった。

何とも思っていない、なんて自分に言い聞かせて、そうして大人ぶったところで、結局全部嘘でしかないし、もっと大切なものを失くしてしまいうような気がした。

言いたいことなんて本当は何も無いのかもしれない。このどうしようもない気持ちだが、行き場のない思いが、無様に命が叫んでいるだけだ。

全部嘘なんだ。偽物なんだ。こんな唄を歌う度に、彼女の言葉は私の爛れた内殻を突き破っていく。

どんなに進んでも、彼女はなおも遙か先にいる。出会った頃からその差は少しも縮まっていない。

彼女と初めて会った日のことを、私はよく覚えている。

雨の日のバス停。傘を差し出してくれた彼女。

あの日の天気予報を知っていたら、あの時間のバスに乗らなかったら、それだけで全てが違っていたのかも、今になって思う。

それは間違っていたのだろうか。正しかったのだろうか。

正解なんてない。きっと彼女ならそう言う。

そして、間違いだってないのだと。

彼女と会わなければ、あの日は何の変哲も無い、ただ過ぎていくだけのありふれた日常の一片でしかなかったと思う。

歩き慣れた道から見える景色も、聴き馴染んだ曲の歌詞も、よく知っている物語も、彼女と出会ってからは違ったものになった。

そして、彼女を失ってからも。

ねえ、ユマ。

こんな命がなければ、私達は最初から何も失うこともなかったのかな。

傷も、過ちも、悲しみも、苦しさも、嘘も、痛みも、知らないまままでいられたのかな。
こんな命がなければ――。